

夢の実現に向けた個別の教育支援計画の作成演習 — PATHシミュレーションの効果 —

千 川 隆*

Preparing an Individualized Educational Support Plan for Dream Realization :
Effects of the PATH Simulation

Takashi HOSHIKAWA

Abstract

This study examines the effects of Planning Alternative Tomorrows with Hope (PATH) simulation as a seminar for preparing an individualized educational support plan. Since the author introduced PATH to Japan twenty years ago, it has been a useful method for special education teacher training and supporters meeting for realizing the dreams of individuals with disabilities in Japan. The participants were 21 undergraduate and graduate students who attended a seminar on the PATH simulation involving a fictitious role play, wherein individuals pose as a child, parents, or teachers, for the concerned person. The participants' consciousness to the seminar was evaluated by a questionnaire about the usefulness of PATH. This study particularly focused on the questions related to the functions of PATH, such as causing a change in the consciousness of a person with disabilities and encouraging cooperation partnership. It was revealed that the participants evaluated the functions of PATH not only as a useful tool for preparing a support plan but also as causing a change in their consciousness. In addition, the author discusses the significance and limitations of the PATH simulation and suggests points for implementing it.

Key words : Planning Alternative Tomorrows with Hope (PATH), individualized educational support plan, person with disabilities, teacher training, person-centered planning.

I. 問題と目的

1. PATHとの出会い

筆者が, Planning Alternative Tomorrows with Hope (以下PATH) に出会ってからすでに20年が経とうとしている。その間に, さまざまな機会を通じてPATHを紹介し(例えば, 千川, 2000), 個別の教育支援計画の作成の中にPATHを取り入れている特別支援学校や, PATHを研修として行った学校が増えてきている(例えば, 熊本大学教育学部附属特別支援学校, 2012)。そこで, 本研究では再度, PATHシミュレーションの効果を検討することにより, PATHのもつ機能について再認識することを目的とした。

筆者がPATHと出会うきっかけとなったのは,

Teaching Exceptional Childrenという学術雑誌に「だれもがMAPSアクションプランニングシステムに属している」という表題の論文(Forest & Lusthaus, 1990)を通じてMAPS(McGill Action Planning System)に出会ったことからであった。当時, 筆者は, 教育相談として保護者と面談する中で, 保護者に情報を適切に伝えられなかったことが原因でトラブルになったことがあり, 保護者との連携の在り方について悩んでいた。その時に, 夢や希望を掲げて, それに向けた連携協力関係を作るMAPSは, とても魅力的なものであった。これまで, 専門家と呼ばれている人たちは, 障害のある本人や保護者が描く夢や希望に対して, あまりにも無頓着であった。当時, ある研究者からは, 障害のある子どもの保護者に安易に夢や希望を持たせることは, 将来に過剰な落胆を招く危険性があるので, 止めた方が良いとの助言を受けたこともあった。

* 熊本大学教育学部特別支援教育学科

その後、筆者は国立特殊教育総合研究所（現在の国立特別支援教育総合研究所）の国際学術研究の一環としてカナダを訪問する機会があり、MAPSを作成したMarsha ForestとJack Pearpointに会うことができた。その際にMAPSよりもさらに未来に志向したプランニングシステムとしてPATHを紹介された。帰国後、国際学術研究の報告書を通じてPATHを紹介した（干川他、2000）。また筆者は、研修の一環としてPATHの技法を用いたシミュレーションを行ったところ、研修に参加した教員から高い評価を得ることができた（干川、2002a）。予想以上の反響から、筆者はPATHが個別の教育支援計画作成のための手立てだけでなく、教師の障害のある児童生徒や将来のビジョンについて大きな意識の変容を生じる可能性のあるものとして考えるようになった。

2. PATHとは何か

PATHはPlaning Alternative Tomorrows with Hope（希望に満ちたもう一つの未来の計画）の略であり、MAPSから発展した行動計画を作成する機会を提供するものである（Falvey, Forest, Pearpoint, & Rosenberg, 1997）。PATHは、MAPSと同じ8つのプロセスから成り、図式的に示すことにより、その人の夢の実現に向かった行動計画をより明確にしようとするものである（Falvey, et al. 1997; Pearpoint, O'Brien, & Forest, 2008）。PATHには、司会進行するファシリテーターと視覚的に話し合った内容を図示するグラフィックレコーダーが必要である。

PATHでは、対象となる人を中心にその人にかかわりのある人たちが、一堂に会して話し合いを行うことで、連携協力関係を生み出すことができる。以下にPATHのステップについて紹介する。PATHのステップについては、これまで様々なところで紹介している（干川他、2000; 干川、2002a; 干川、2002b）が、本稿ではPATHのマニュアルと筆者のファシリテーターとしての経験も踏まえて、PATHを実施する際の留意点を記すことにした。

ステップ1「夢（ポラリス）に触れること」

夢や希望が進路を指し示す北極星であることから、原著ではNoth starという用語が用いられており、筆者は当初「幸せの一番星」と訳していたが、現在、韓流ドラマ冬のソナタの影響を受けて、「ポラリス」と訳している。

ステップ1では、本人にとっての夢や希望について、批判することなしに意見を出し合うことから始める。参加者の中には、なかなか現実の状態から離れることができず、「将来の夢なんて思い浮かばない。」「障害の重いわが子が、夢や希望な

ど持てない。」などと言う保護者もいた。そのような場合に筆者は、この10年間の福祉や社会の変化を挙げ、10年後では今と違った未来があるかもしれないと説明している。

また保護者が語っていることが、本人の夢ではなく保護者の夢であることもよくある。その際にファシリテーターは、本人にとって叶うと幸せなことは何かを確認することが必要である。例えば、ある保護者は、「死ぬまでこの子と一緒に暮らせるように、将来は田舎で自給自足の生活をしてのんびりと過ごしたい。」と夢を語っていた。しかし、それは保護者自身の夢であり、本人は本当に田舎で保護者と暮らしたいのであろうか。本人は、「友だちと一緒にグループホームに住みたい。」「自分のできる仕事に取り組みたい。」と思っているかも知れない。ステップ1のポイントは、出された夢や希望が親や教師にとってではなく、本人にとっての夢であり叶うと本人が幸せになるかどうかである。

また、大人になったときに、どこで誰と一緒に住んで、どのような仕事について、どのような余暇を楽しんでいるかなど、具体的なビジョンを思い描くように教示することによって、参加者はより具体的な将来の姿を思い描くことができる。その際に重要となる情報は、対象となる人が何ができるかできないかという能力の視点ではなく、何が好きか、誰と一緒にいると楽しいか、どんな（余暇）活動をずっと続けていきたいか、などの本人の思いである。

ステップ2「ゴールを感じる」

本来のPATHのマニュアルによれば、6ヵ月後や1年後、2年後のゴールを設定している。筆者は、本来のPATHの将来の設定が短く、わが国ではなかなか現実から離れたビジョンを描くことが難しいため、ゴールを本来のPATHよりも遠い将来に設定している。具体的に筆者は、ステップ1の夢や希望を描く中で対象となる人の将来の姿を共有した後、それに向けた道すがら、節目となる時期を考えるように参加者に促している。例えば、中学校（中学部）卒業後、高等学校（高等部）入学後や卒業後、などである。ゴールの設定は、対象の人の年齢によってまちまちである。

具体的には、まずゴールの年月を設定して、そのときに対象となる人のまわりで、どのようなことが起きているかについて、いろんな意見を出してもらおう。もちろん、せっかく夢や希望を語っているからポイントは、その未来に向けてどんなことが起きているか、である。その際、ファ

シリテーターは、PATHのマニュアルのポジティブ&ポッシブル、つまり「肯定的なことで起こりそうな」に従って、意見を出すように教示する。

具体的な出来事を挙げる事が出来たら、ファシリテーターは、ゴールを達成したときにどのように感じたかについても、円の外のところに記すように指示する。この記述は、具体的には「活き活き」「のびのび」などの形容詞であったり、「達成感」「充実感」などの熟語であったりである。

ステップ3 「いまに根ざすこと：どこに私／私たちはいるか」

ステップ1と2ですべてと明らな未来を描いてきたが、ステップ3では参加者は、今の状況の中でうまくできていない点を確認することになる。よく、個別の指導計画を考える際に、なるべく否定的な表現を避けて肯定的な表現に留めようとする教師がいる。その背景には、子どもの否定的な面ばかりを見て、できない原因をその子どもに帰する教師がいるからであろう。PATHでは、「○○ができない」など否定的な表現を用いるが、子どもを否定的にとらえて排除するのではなく、むしろ中心に据えて夢の実現に向けて取り組むものである。PATHのマニュアルの中でも紹介されているが、夢や希望と現実がかけ離れていればいるほど、大きなストレスを生じることになる。しかし、ストレスが強いほど、それは夢や希望の実現に向けた大きな原動力にもなる。よく、筆者は参加者にゴムひもを想像してもらい、夢や希望と現実が離れるほど、その実現に向けた力が強くなることを理解してもらおう。そうすることによって、現実が夢や希望からかけ離れた状況であり、そのことを表すために否定的な表現を用いたとしても、決してそのことが悪いことでないことを参加者に理解してもらおうようにしている。

またファシリテーターは、「ゴールを感じる」と同様に、欄外にこのときの本人にとっての気持ちや感じを記しておくように指示する。

ステップ4 「含めるべき人を明らかにする」

ステップ4で、ファシリテーターは「目標を成し遂げるために誰を必要とするか」という質問を行う。ミーティングに参加している本人や保護者、それに教師は当然含まれるが、それ以外の参加者も本人の夢を叶えるための重要なサポーターの一人である。

ステップ5 「もっている力を強める」

このステップでファシリテーターは、「夢を実現するためにどのような力を強めたらよいか」と質問して、意見を出すように求める。ファシリ

テーターは、例えば将来の仕事に就くための体力などの力や、その体力をつけるために毎日ジョギングをするなどの力を強めるための方法について考えるように教示する。

ステップ6 「近い将来を考える」

本来のPATHでは、ステップ6で「2、3ヵ月後の行動を図示すること」とステップ7では「次の1ヵ月を計画すること」となっている。前述のように本来のPATHは近い将来を想定しているので、このような質問でもかまわないが、筆者が実施する場合に、現実にとらわれないようにするために本来のPATHよりも遠い将来の設定を行っている。このため、筆者は本来の2つのステップを合わせて「近い将来」として検討するようにしている。具体的には、ファシリテーターはステップ2「ゴールを感じる」と同様に、年月を想定させ、そのときにゴールに向かう道すがらどのようなことが起きているかについて、話し合うように誘導する。

ステップ7 「はじめの一步」

はじめの一步として、明日から、場合によってはこのミーティングが終わってからすぐに、参加者が具体的に何をするかについて話し合う。他の人にコンタクトをとる必要があるのであれば、ファシリテーターは、具体的に誰がどのようにコンタクトをとるかを明らかにしておく。

3. PATHその後

およそ20年前にPATHを紹介して以来、さまざまな形でわが国の中でPATHが活用されるようになってきた。ここでは、PATHの技法を用いた研修プログラム(PATHシミュレーション)と支援者ミーティングについて紹介する。

1) 研修プログラムとしてのPATHの技法

筆者は、研修の一環としてPATHの技法を紹介してきた(干川, 2002a; 干川, 2002b)。本来PATHは、障害のある人を中心に据えて関わる人たちが一堂に会して話し合いを行うことが前提である。しかし、研修として本人や保護者を含めて一斉にPATHを実施することは困難である。そこで、研修に参加している教師が、本人や保護者、その他のかわる人たちの役を演じることによって、PATHの技法を多くの人たちに体験ながら理解してもらおう方法として、PATHシミュレーションを実施してきた。

PATHシミュレーションは、各班6から7人程度の参加者から成るグループを設定して、参加者に対象となる人を想定してもらい、本人、保護者、教師は必ず含めて、それ以外に関わりのある人たちの役

割を設定する。そして前述のPATHの7つのステップに基づいて、ステップごとに教示をしながら一斉に話し合いを行う。一斉に行うことができるので、100人から200人といった学校の教職員全体で行うことも可能である。

実施する際に筆者は、各グループに同じ学年や同じ学部の人が入らないようにし、いろんな立場の人たちが関わるようなグループ分けを心がけている。そのことによって、PATHの中にあるような視点からの意見を集めることができる。実施するに当たっては、約3時間の実施時間がかかるため、まずその時間を確保するように依頼している。

このPATHの技法を用いた研修は、筆者だけではなく国立特別支援教育総合研究所を中心に、多くの人たちによって実践されてきている（例えば、齊藤、2004；涌井、2009）。

2) 支援者ミーティング

もう一つの流れは、関わる人たちが一堂に会してPATHの考えに基づいて話し合う支援者ミーティングである。支援者ミーティングの取り組みは、熊本大学教育学部附属特別支援学校（以下熊大附特）の実践によってその有用性が明らかとなってきた（熊本大学教育学部附属特別支援学校、2012）。熊大附特では、平成16年から実際にPATHを実施し、その有効性について注目してきた。しかし、一人の児童生徒に3時間かかるため、すべての児童生徒に実施することが困難であることが課題となった。

PATHの良いところは実際に実施してみてもわかったけれども、1回実施するのに3時間も時間がかかることは、すべての児童生徒に実施することは不可能である。そこで熊大附特は、PATHの本質的な部分を大切にしながら時間を短縮する方法を模索していった。その結果、熊大附特は、①夢や希望を語り、②その実現に向けて3年後の姿を描き、③家庭と学校ではじめの一步としてその役割を分担して取り組むことで、PATHの本来の良さを大切にしながら1時間程度に話し合いの時間を短縮することができた。

現在、熊大附特では、小学部1年生と4年生、中学部1年生、高等部1年生で、夏休みの始めに合わせて支援者ミーティングによる個別の教育支援計画の作成が行われている。この熊大附特の支援者ミーティングに対する参加者の評価は、非常に高い（熊本大学教育学部附属特別支援学校、2012）。

4. PATHの意義

PATHはPerson Centered Planning（以下PCP）の一つである。PCPはもともとノーマライゼーションの理念を実現するためのワークショップの技法とし

て開発されてきたが、いまでは単なる技法にとどまらず、社会や関わる人たちの意識を変える理念となっている（干川、2013）。

O'Brien and O'Brien（2000）によれば、PCPは貢献する地域社会の一員として、発達障害のある人の実用的な理解を発生する組織的な方法である。PCPは、障害のある人を社会に当てはめるのではなく、社会を障害のある人に当てはめようとする考えである。わが国でも、ノーマライゼーションやインクルージョンの考えに基づいて、障害のある人の教育や福祉の取り組みが実施されてきた。しかし、特別支援学校高等部卒業生の就職率の推移を見ると、最近やっと上昇しているが、この40年間にずっと減少傾向であった。また、長年特別支援学校の高等部で生徒を指導している教師は、この生徒はこの障害の程度だからと、将来、作業所で働くことに向けた指導を行いがちである。最近では、キャリア教育の影響を受けて、卒業後の施設のニーズを踏まえて、その施設のニーズに合わせて生徒を送り出そうとさえしている特別支援学校もある。つまり、特別支援教育は以前よりも注目されるようになってきているが、障害のある人を社会に当てはめようとする傾向がますます強くなっているのではなか。

PCPでは、障害のある人を社会に当てはめていくのではなく、本人を中心に据えて本人の夢や希望を実現するために、関わる人たちがどのように連携協力するかが問われている。換言すれば、PCPを実施するねらいは、社会を本人のためにどのようにあつらえることができるかである。

5. 本研究の目的

本研究では、わが国で紹介されて20年が経とうとしているPATHを用いた研修として、PATHシミュレーションの効果について検討することを目的とした。干川（2002a）は、研修の中にPATHのシミュレーションを取り入れて実施し、「ワークショップへの満足さ」「ワークショップによって知識が身についたか」「ワークショップによって技能が身についたか」「グループのコミュニケーションを推し進める方法か」について5件法で評価したところ、技能が身に着いた項目は評価が低かったが、それ以外の項目ではすべての参加者が「大変そう思う」「少しそう思う」と評価していた。筆者は、PATHが単なる個別の教育支援計画作成のための手立てだけでなく、連携協力するための有用な方法であり、さらに障害のある人に対する意識の変容を目指したものであると考えた。そこで本研究では、干川（2002a）のアンケート項目に、さらに「障害のある人たちについて

意識が変わったか」等の項目を追加して、PATHシミュレーションを用いた研修を実施し、その意義について検討する。

Ⅱ. 方法

1. 参加者

本研究の参加者は、P大学の特別支援教育教員養成課程学生と特別支援教育特別専攻科学生、院生の21人（20歳から42歳、平均年齢23.29歳）であった。専攻科学生の中には4人の現職派遣の教員が含まれていた。参加者は、PATHを用いた演習の案内を受け、自ら本研究に参加した者であった。演習は、それぞれ1時間半ずつを2週にわたって実施され、参加者は2週続けて参加できる者に限られた。

2. 手続き

実施場所は、P大学内の演習室であった。参加者は、7人ずつの3つのグループに分けられ、それぞれ机を向かい合わせにしてお互いの顔が見える位置に着席した。最初に筆者からPATHの概要の説明を受けた後に、今回の話し合いの対象となる障害のある人を各グループで一人想定するように教示された。それぞれのグループでは、障害のある兄弟やボランティアで関わっている児童等が今回の話し合いの対象者として選ばれた。そして、参加者は対象者も含めてその人にかかわる人としての役割を決定した。役割の中には、本人、保護者、教師は必ず含めるようにし、それ以外の役割は、各グループで想定した対象となる障害のある人によって異なっていた。

話し合いの対象となる障害のある人と参加者の役割が決まったところで、PATHシミュレーションが開始された。なお、PATHはグラフィックを用いることが特徴であるが、筆者が3つのグループのファシリテーターの役割をとり、特にグラフィックレコーダーを決めていなかったが、各班でそれぞれ参

加者が交代しながら絵や文字の記入を行っていた。PATHのステップは、前述の7つであった。7つのステップを終了したところで、タイトル（例えば「AくんのPATH」）と参加者の役割とサインを記入することでPATHの完成とし、それぞれのグループが皆の前に出て出来上がったPATHを発表するようにした。

3. 効果の測定

PATHの効果調べるために、5件法によるアンケートを実施した。5件法は、5（大変そう思う）、4（そう思う）、3（どちらでもない）、2（あまりそう思わない）、1（まったくそう思わない）であった。アンケートは、①今回のグループワークは満足のものだったか、②グループワークを通じて新しい知識を習得できましたか、③グループワークを通じて新しい技能を習得できましたか、④グループワークを通じてグループのメンバーと仲良くなれましたか、⑤PATHを知ったことでこれまでの障害のある人への意識が変わりましたか、⑥PATHの考え方は、個別の教育支援計画を作成する上で役立ちますか、⑦PATHの考え方をういて個別の指導計画を作成したいですか、⑧今後もPATHを用いたグループワークに参加したいと思いませんか、の項目と自由記述の欄から成っていた。なお、質問項目の①から③は、干川（2002a）でPATHシミュレーションを実施したときと同じ質問項目であった。

アンケートは、PATHの作成と発表が全て終了したときに、参加者に配布され回収された。

Ⅲ. 結果

1. アンケート結果

アンケートの結果のうち、①から④までの回答を図1に、⑤から⑧までの回答を図2に示す。図1から明らかなように、参加者の多くは質問項目に対し

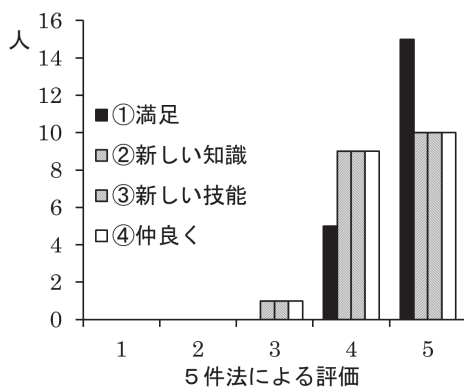


図1 アンケートの結果①から④

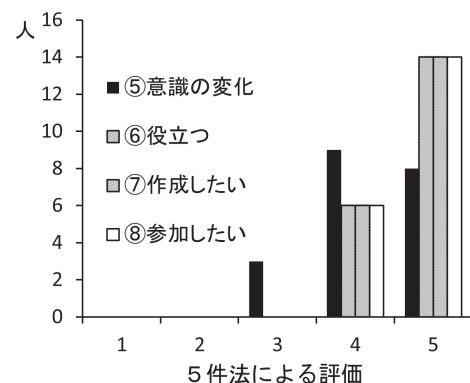


図2 アンケートの結果⑤から⑧

て、「大変そう思う」「そう思う」と回答していた。特に①満足したかについては、21人中15人の参加者が「大変そう思う」と回答していた。その他の項目も21人中10人が「大変そう思う」、9人が「そう思う」と回答していた。「どちらとも言えない」と回答した被験者はそれぞれ1人ずつであった。

次に図2から明らかなように、⑥から⑧の項目については、21人のうち14人が「大変そう思う」、6人が「そう思う」と回答していた。⑤の項目のみ、21人中8人が「大変そう思う」、9人が「そう思う」、3人が「どちらとも言えない」との回答であった。

2. 自由記述の内容について

21人中20人でアンケートの自由記述の欄に記載があった。その中で一番多かった記述として6人が共通理解について記述していた。具体的には、「専門家でなくてもわかりやすくまとまるので、関わる人で共通理解しやすいと思った。」「場を共有することで目指すところが一致するので、その後の教育活動につなげやすいと思う。」「夢や希望を皆で共有して、その人のための手立てを考え出すプロセスがあるのは良いことだと思った。」などの記述があった。次に多かったのは、ビジョン・見通しと楽しい・面白いが5人ずつであった。ビジョン・見通しの具体例は、「どのような段階が必要なのかが支援する側も見通しが立てられる。」「未来を見すえていますべきことは、と考えることで、一つ一つポジティブに見通しを持つことができるなと思った。」「保護者との情報、ビジョンの共有という意味で大変役に立つと思った。」などであった。楽しい・面白いの具体例は、「考えていてとても楽しかった。」「子どもの未来を考えることは、とても楽しいと思った。」「夢や希望を語ることはとても楽しい。どんな人でも体験してほしい。」などであった。その次に多かった記述は、取り入れたい・広めたいといったものが、4件であった。具体的には、「前向きな会議でぜひ取り入れたいなと思いました。」「教師になったときにも、この考え方を大切にしていきたいと思った。」などの記述であった。その他として、複数の視点の大切さや「夢や希望を考えることは、本人のためにも本当に大切だと思いました。」といった取り組みの大切さの記述、さらに「PATHの良さがわかった。」の記述が3件あった。

IV. 考 察

1. PATHの意義と限界

PATHシミュレーションが研修としての効果があ

ることを期待して、研修後のアンケートからPATHの効果を検討した結果、ほとんどの項目で肯定的な評価であった。本研究の結果は、これまでのPATHシミュレーションの研修の評価(干川, 2002a)と同様に、高い評価を支持する結果となった。干川(2002a)と本研究の①から③の質問については同様のものではあったが、本研究ではさらに、⑤障害者に対する意識の変化や④参加メンバーと仲良くなれたか、を尋ねている。⑤の項目は他の項目よりも、低い評価であったが、全体として高い評価を受けたことから、PATHシミュレーションによる演習は、単なる個別の教育支援計画の作成の技法に留まらず、障害のある人たちについてより肯定的な意識の変容を促す方法であると考えられる。

アンケートの結果で特に興味深かった自由記述は、PATHシミュレーションの特徴を表わす言葉として、「楽しかった・面白かった」があった点である。最近、特別支援教育に関する研修はたくさん実施されるようになってきているが、参加者が楽しかったと思える研修はいくつあるだろうか。楽しかったと言ったときに、多くは講師の冗談が面白かったといった場合が多い。PATHの自由記述に見られるように子どもの夢や希望を語ることは、とても楽しいことである。障害があっても、保護者が子どもに対して夢や希望を抱くことは、楽しいことであり普通のことである。専門家と言われている人たちは、どうしたら保護者が夢や希望を失ってしまわないように援助することが大切である。筆者は、PATHを多くの子どもたちに実施することで、「夢や希望を語るのが楽しい」と障害のある保護者も思えるような取り組みをぜひ実施していきたいと思う。

次に本研究の限界として、本研究の参加者が、事前にPATHシミュレーションを実施するアナウンスに対して興味をもって参加していたことであろう。PATHについては事前に詳細な説明を伝えられてはいなかったが、参加者はそれなりに本研修に対して期待して参加した人たちであった。このため、評価がより高い結果となったことが考えられる。本研究の限界は、PATHそのものに興味のない研修者でも、同様の評価が得られるかどうかである。

2. PATHの実施に向けて

筆者は、これまで九州を中心に特別支援学校でPATHシミュレーションを用いた研修を行ってきた。いくつかの学校では研修だけに留まらず、児童生徒の個別の教育支援計画の作成の中でPATHを取り入れるようになってきている。そこで、本稿を終えるに当たり、これまでの筆者の経験と本研究の知見を

踏まえて、シミュレーションではなくPATHを実施する上での留意点について触れたい。

1) 関わる人たちが一堂に会すること

まず、PATHを成功させるためには、関わる人たちが一堂に会することが必要である。熊大附特は支援者ミーティングとして関わる人たちが集まっている。多くは、担任、親、兄弟、以前の担任、福祉関係者（ケアマネージャーや放課後デューサーの担当者等）などが参加している。医療関係者が参加することは難しいが、最近では福祉関係者が必ず参加するようになってきており、協力が得られやすい。保護者によっては、10人を超える人たちを集めて来る場合もある。

筆者が特に重要と感じているのは、兄弟姉妹や祖父母の参加である。兄弟姉妹や祖父母は、家族としてどのように関わったら良いかを迷っていることが多い。日頃の取り組みを肯定的に評価されることで、兄弟や祖父母は明日からもがんばる勇気を得ることができるであろう。さらに、同年齢の世代として兄弟姉妹が参加することで、例えば「もっと化粧やファッションに気をつけて欲しい。」などの当たり前の感覚の指摘がとても重要なことがある。筆者は、必要なときには年齢の近い学生ボランティアを参加させることもあった。

2) 有能なグラフィックレコーダーの確保

次に、PATHを成功させるためには、有能なグラフィックレコーダーが必要である。以前、筆者はファシリテーターとしてPATHを実施したときに、その学校の美術の先生がグラフィックレコーダー役を買って出た。ところが、きれいな絵を描くことに終始され、絵を描き上げるまでに会議が中断し、また、出来上がった絵が黒のマジックだけの明るい未来とは思えない絵であった。その先生は、黒のマジックで下書きをして、これから時間をかけて色を付けて完成させるとのことであった。

この経験から筆者は、絵が上手いということとその場の話し合いの状況を踏まえて絵が描けるということとは別のことであると考えようになった。今進行している話し合いの状況を的確にとらえて、状況のポイントを的確に絵に表すことは、まさにセンスの良さが求められるであろう。

それ以降、知り合いの先生にお願いしてPATHを実施してきた。その先生はもともと美術の先生ではあるが、その場面に応じて適切に素敵な絵を描いてくれるので、ファシリテーターとしてもとても進めやすい。また出来上がったPATHは、夢や希望に満ちあふれた明るい未来を指し示してくれる。

3) 障害が重いと夢は描けないのか

PATHの研修を行った際に、担当している児童は障害が重度重複しており、意思の表出が困難であるため、夢や希望が描けないとの指摘を受けたことがあった。本当に、障害が重度な子どもの場合に、夢や希望が描けないのであろうか。

筆者は、どんなに障害が重度であったとしても、受信の仕方を工夫することができれば、その子どもの思いや好みを推測できると考える。最初から、この子どもは障害が重度重複しているから、何も表出できない、何も反応がないと思って見てしまえば、結果として何もとらえることはできないであろう。筆者は、重度重複の子どもたちにかかわる際に、支援を工夫し感受性を高めることで、例えば、ほんの少し身体の動きや、ほんのわずかな表情の変化を見逃さないようにすることで、その子どもが誰と一緒にいるときが楽しくて、何をしているとき（好きな音楽が流れているとき）が楽しいのかを判断することができると思う。大切なのは、障害がどれだけ重度で重複していたとしても、援助を工夫すればきっと思いを表出できると思って周囲の人たちが関わることであろう。

以前に見学にうかがった横浜市にある訪問の家「朋」の取り組み（日浦，1996）は、どんなに障害が重たいとしても、その子どもの夢や希望をもつことを勇気づけるに違いない。

3. 終わりに

筆者が、PATHをわが国に紹介してから20年が経とうとしている。PATHを始めPCPが特別支援教育に限らず福祉の領域でも、いろんな形で取り入れられるようになってきている点は、時代の流れを感じる。しかし、相談に来られる保護者や本人の話を聞いていると、まだまだ本人の思いが踏みにじられていることが多い。今後も、ぜひ障害のある人たちの夢や希望を大切にしたい取り組みが増えることを期待したい。

V. 文 献

- Falvey, M. A., Forest, M., Peapoint, J., & Rosenberg, R. L. (1997) *All my life's a circle: Using the tools Circles, MAPS & PATHS*. Tronto, ON; Inclusion Press.
- Forest, M. & Lusthaus, E. (1990) Everyone belongs with MAPS action planning system. *Teaching Exceptional Children*, 22(2), 32-35.
- 日浦美智江 (1996) 重症心身障害者と自由時間. 教育と医学, 12月号, 43-48.

- 干川 隆 (2000) 夢の実現に向けて手を結ぶ. 障害児の授業研究, 4月号, 12
- 干川 隆 (2002a) PATHの技法を用いたワークショップの試み. 国立特殊教育総合研究所, 知的障害児の指導に関する教師のトレーニングプログラム開発に関する研究, 29-37.
- 干川 隆 (2002b) 教師の連携・協力する力を促すグループワーク: PATHの技法を用いた試みの紹介. 知的障害養護学校における個別の指導計画とその実際に関する研究, 国立特殊教育総合研究所知的障害教育研究部重度知的障害教育研究室一般研究報告書, 43-47.
- 干川 隆 (2013) 本人の思いを生かした支援計画の作成. 発達障害研究, 35, 320-326.
- 干川 隆他 (2000) パートナーシップの原動力としての夢: カナダにおけるMAPSとPATHの紹介. 科学研究費成果報告書, 障害児教育分野における協力・連携関係(パートナーシップ)の形成に関する調査研究, 44-50.
- 熊本大学教育学部附属特別支援学校 (2012) ポラリスをさがせ～熊大式授業づくりシステムガイドブック～. ジェアース教育新社.
- O'Brien C. L. & O'Brien, J (2000) The origins of person-centered planning: A community of practice perspective. J. O'Brein and C.L.O'Brien (Eds.) *Implementing person-centered planning voice of experience*, Toronto, ON: Inclusion Press, 24-57.
- Pearpoint, J., O'Brien, J., & Forest, M. (2008) *Planning alternative tomorrows with hope: A workbook for planning positive future (2nd edition)*, Toronto, ON: Inclusion Press.
- 齊藤宇開 (2004) 協力関係の推進—PATHの技法. 知的障害のある子どもの担任教師と関係者との協力関係推進に関する研究—個別の指導計画の作成に焦点を当てて—. 国立特殊教育総合研究所知的障害教育研究部重度知的障害教育研究室一般研究報告書, 36.
- 涌井 恵 (2009) 本人中心アプローチによる障害のある子どもの支援の輪作りに関する事例報告—小学生へのPATH (Planning Alternative Tomorrows with Hope)の実施—. 国立特別支援教育総合研究所, 教育相談年報, 30, 2-6.

附記: 本研究は, JSPS科研費15K04564の助成を受けた.